慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文化ナショナリズムとしての戦艦「大和」言説 : 大和・ ヤマト・ やまと
Sub Title	The image of battleship YAMATO, from the perspective of cultural nationalism.
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.120- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化ナショナリズムとしての戦艦「大和」言説

―大和・ヤマト・やまと―

The image of battleship YAMATO, from the perspective of cultural nationalism.

塚田　修一

１．はじめに

（１）本稿の目的と位置付け

本稿の主目的は、アジア・太平洋戦争時の戦艦「大和」に関する言説および表象を、文化ナショナリズム、すなわち「ネーションの文化的アイデンティティが欠如していたり、不安定であったり、脅威にさらされている時に、その創造、維持、強化を通してナショナルな共同体の再生を目指す活動」（吉野 1997:11）という観点から考察することである。

周知のように、戦艦「大和」は 1945 年に沈没した、物理的には失われた存在である。しかしながら、敗戦以降、現在に至るまで夥しい量の戦艦「大和」言説-表象が生み出されている。そしてその多くが、例えば「日本人なら知っておきたい　空前の巨大戦艦の誕生、戦い、そして最後」（Gakken Mook『戦艦「大和」の真実』: 表紙）や「戦艦大和と日本人」（永沢 2007＝2012）という文言から推察されるように、人々の日常的な意識の水準での「ナショナリズム感覚」と隠微な関係を取り結び続けている。本稿では、この「大和」の言説-表象を歴史的に追尾することにより、それらの文化ナショナリズムとしての作用・機能の様相、及びその変容を明らかにする。

また、「大和」言説-表象を分析することは、すなわち戦争意識の有り様を考察することでもある。本稿では、先行研究において蓄積されてきた戦争観の分析を参照しつつ、それらと「大和」言説-表象との関係性を記述していく。これが、本稿の第二の目的である。

さて、本稿はまず、戦後日本のナショナリズムの歴史社会学的研究として位置づけることが出来る。戦後日本のナショナリズムに関しては、これまで多くの社会科学者によって論じられてきたが、近年の研究のうち、本稿と強く関心領域を共有するのは、小熊（2002）や福間（2006）である。小熊も福間も、「戦争体験」を観察の主軸として言説を分析し、戦後ナショナリズムの有り様と変容を通時的に記述している――それが両書の独創的な点であり、何よりの魅力ともなっている――が、本論ではそれらに多くを学びつつも、戦艦「大和」の言説-表象を観察の主軸として設定し、ナショナリズムの様態の新たな記述を試みる。

さらに本稿は「戦争の語り」および「戦争観」の研究としても位置づけることが出来る。1990 年代半ばに「戦争の記憶」が論じられ始めて以降、この領域には多くの優れた研究が蓄積されてきた（野上 2006、成田 2010 など）。中でも本稿にとって最も重要な仕事は、吉田裕による、戦後日本における「戦争観」の有り様の通時的分析である（吉田 1995＝2005）。吉田は、戦後日本における、

塚田修一「文化ナショナリズムとしての戦艦「大和」言説―大和・ヤマト・やまと―」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）120-133 頁

対外的には「必要最小限度の戦争責任」を認めるが、対内的には戦争責任問題を「事実上、否定する、あるいは不問に付す」という姿勢を「ダブル・スタンダード」として指摘している。この吉田の主張に本稿も概ね首肯する。ただし本稿では、そうした「戦争観」と、文化ナショナリズムとしての「大和」言説-表象との関係性の考察を通して、「戦争観」および「ダブル・スタンダード」をとりまく社会意識の状況を明らかにするものである。

（2）記述の視点と方法

本稿の記述の視点と方法について説明しておこう。先述のように、本稿は「文化ナショナリズム」という観点から考察を行うが、吉野（1998）は、1970～80 年代の「日本人論」を素材として、この文化ナショナリズムを検討している。その際に吉野は、これまでの「日本人論」研究が、日本人論の「生産」面の分析すなわちテクスト内容の分析と批判および「ナショナリスト探し」に終始していたことを指弾し、「日本人論」がどのように受容・消費されたのかに着目して分析を進める。それにより、「ナショナリズムの消費」という画期的な切り口を獲得することに成功している。本稿もこうした吉野の視点を共有しており、「大和」言説 - 表象の内容分析というよりはむしろ、どのように受容・消費されて、文化ナショナリズムとして作用したのか、を観察していく。何より戦艦「大和」は、マンガやアニメ、プラモデル等様々な形態で消費されてきたからである。そしてそれらの観察によって、人々の日常意識の水準でのナショナリズムの有り様を記述することが出来る。

また、本稿の記述方法としては、「言説の歴史社会学」を採用する [1)]。次節で見る通り、物理的（物質的）な「モノ」としての戦艦「大和」は 1945 年 4 月 7 日に既に失われており、以来、戦艦「大和」は「言説」として存在-運動してきたからである。また、扱う時期は、1950 年代から 90 年代までとし [2)]、便宜上、年代をゆるやかに 10 年ごとに区切りながら記述していく。

なお、言説に関しては、主に国立国会図書館検索システム（NDL-OPAC）、および大宅壮一文庫雑誌記事索引検索により収集および分析を行った。また、映像資料の収集に際しては、『別冊映画秘宝戦艦大和映画大全』（2010 年、洋泉社）を参照した。

（3）戦艦「大和」史の概観

戦艦「大和」に関する基本情報を素描しておこう [3)]。戦艦「大和」は、アジア・太平洋戦争時に大日本帝国海軍により建造された、世界最大の戦艦である。全長は 263 メートル、排水量は 70000 トンを超え、乗員数 2300 人を数える、超大型の体躯であり、装備には史上最大の 46 センチ主砲 3 基 9 門を備えていた。1937 年に呉海軍工廠において起工され、1940 年に進水、1941 年に就役し、1942 年からは連合艦隊旗艦となった。1944 年にはマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に従事するが、目立った戦果をあげることはなく、1945 年 4 月 7 日に、海上特攻作戦（天一号作戦）途中に米軍の猛攻を受け（坊ノ岬沖海戦）、徳之島沖に沈没する。

この「大和」の存在は、建造時より終戦を迎えるまで、沈没してもなお軍事機密であり、また終戦後も GHQ の検閲（への恐れ）により、しばらくは一般の人々が知るところとは成り得なかった。

２.「大和」の 50 年代

（1）吉田満『戦艦大和ノ最期』

戦艦「大和」の名を一般に知らしめたのが、「大和」に副電測士として乗艦し、沈没からの生還者である吉田満によって書かれた『戦艦大和ノ最期』である。

占領中に GHQ による検閲により全文削除が命じられるなどの紆余曲折を経て、サンフランシスコ講和条約の発効によって占領が終結する 1952 年に出版されたこのテクストは、「命がけで戦い死線を越えてきた、そうした経験がほとんど感情の屈折なしに語られている」同時期の「戦記もの」と同様に（高橋 1988:40）、一種の記録文学として書かれており、それゆえに読者に強い印象を残した。例えば、竹西寛子はこのテクストを読んだ際のことをこう述懐している。

> 「1958 年の秋、夜更けてから開いた一冊の書物に、私は思いがけない衝撃をうけた。それは、もと海軍の青年将校によって書かれた戦争の記録であった。私は、自分のからだが徐々に冷えてゆくように感じたが、眼の裏側だけは、灼けて、しみるようだった。何時間の後には勤めに出なければならないということも、そのために、少しでも睡眠をとっておかなければならないということも、とうてい自分のこととしては考えられなかった。戦争が終ってすでに 13 年も過ぎているという日に、迂闊にもわたしは「戦艦大和ノ最期」を読んだ」（竹西 1964:98 - 99）。

このように竹西に「思いがけない衝撃」を与えたこのテクストは、その後の吉田自身の旺盛な執筆活動と相俟って、「大和」の名とその最期を広く知らしめることになる。

そして、この『戦艦大和ノ最期』は、そのカタカナ文語体によって、江藤淳に「痛切な感動を覚える」と評されるほどの「悲劇」として受容されるわけだが [4)]、ここで指摘しておきたいのは、この「悲劇」の物語は、具体的な「敵の姿や顔」が一切現われない、自己完結的な性格を有しているということである [5)]。

この自己完結的な「悲劇」としての『戦艦大和ノ最期』は、福間良明が指摘するように、任侠的な心情と共鳴しつつ（福間 2007）、戦後日本社会の言説空間を流通していく。

（2）松本喜太郎『戦艦大和―その生涯』

この『戦艦大和ノ最期』の一方で、文化ナショナリズムの観点から「大和」を考察する上で注目しておきたいのは、同じく 1952 年に出版された松本喜太郎『戦艦大和―その生涯』というテクストである。大日本帝国海軍の技術大佐で、「大和」の設計補佐を務めた著者によるこの技術レポートによって、「大和」の性能やテクノロジーが詳らかにされ、その設計・建造に注がれた「日本の技術力の優秀性」が称揚されていくのである。

このテクストは、雑誌『自然』1950 年 1 月～9 月号に連載された記事が基になっているが、その最終回において、松本はこう述べていた。

「一介の技術者として筆者は、「戦艦大和」の記事完結にあたり、一言述べさせてもらいたいことがある。それは、「日本人は自己の有する技術能力の優秀性を自覚すべきだ」ということである。日本の造船界はかつて小鷹級及び妙高級巡洋艦を世に出し、各国海軍をしてその優秀性に眼を見はらせた。戦艦をつくるにも、その技術の粋をこめて大和型を送り出したのである。これらの事柄は、日本人の優れた技術能力を現わしたほんの一端にしか過ぎない。問題は軍艦にあるのではなくて、これを作って示した日本人の才能にある」（『自然』1950 年 9 月号:79、下線引用者）

そしてこうした謂いは、次のような言説によって反復・強化されていく。

「技術というものは一日にして成るものではない。突飛な飛躍的な進歩というものは技術の世界にはあり得ないのである。大和はそのいい例で、もし我々の先輩の遺産がなかつたら、かれはこの世に生れなかつたかも知れない。不沈艦は沈んだ。しかし、その技術は亡びてはならないし、又亡ぼさせてはならないのである」（「戦艦大和いまだ沈まず」『文藝春秋』1955 年 11 月号:253）

「世界最大の戦艦「大和」「武蔵」を造った日本の技術と工業力は、戦後十六年たった今もなお生きている。マンモス・タンカーを続々と進水させている現在の日本造船工業の実力が、両巨艦を建造したという実績に発していることはいうまでもあるまい。ニコンやキャノンなどの優秀カメラを産んだ光学技術も、これまた両巨艦につまれた十五メートル測巨儀と深いつながりを持っているのだ」（「特集「大和」「武蔵」は生きている！悲劇の巨艦その現代的意義」『週刊朝日』1962 年 1 月 12 日号:18）

こうして称揚される、「大和」に注がれた「日本人の優れた技術力」が、敗戦国民のプライド／アイデンティティの拠り所として作用していくことになる。

こうした、文化ナショナリズムとしての「大和」が要請・欲望された背景に在るのは、50 年代の日本国民が陥っていたアイデンティティの危機である。青木保によれば、この時期の日本人のアイデンティティは、自らの「文化」の「否定」と「劣性」の認識に求められていた（青木 1990＝1999）。また、戦後のベストセラーの調査から、社会意識の推移を取り出した辻村明によれば、敗戦直後から約 10 年くらいの時期におけるベストセラーは、「日本に対する否定」の論調が圧倒的に支配的であったという（辻村 1981）。

さて、吉田裕は 1950 年代に「ダブル・スタンダード」の成立を指摘しているが、その対内的な態度―戦争責任問題を「事実上、否定する、あるいは不問に付す」―の形成において、上述の文化ナショナリズムとしての「大和」言説の作用を推察することが出来よう。

３．60 年代の「大和」

（1）戦記ものブームの中の大和

1960 年代前半に、「戦記ものブーム」が起こる[6)]。少年マンガ誌の表紙にアジア太平洋戦争時の戦闘機や戦艦が描かれ、また少年雑誌では戦時の兵器が特集され、またアジア太平洋戦争を舞台としたマンガ『0 戦はやと』（辻なおき、1963 年～『週刊少年キング』連載）や『紫電改のタカ』（ちばてつや、1963 年～『週刊少年マガジン』連載）などが男子の人気を博す。

そしてこの「戦記ものブーム」の中心に在ったのが「大和」であった。1957 年生まれの石破茂は、こう述懐している。

> 「（「大和」のことは）幼稚園児の頃から知っていましたよ。当時は月刊漫画雑誌っていうのが人気でね、そのカラーの特集がいつも、「大和」かゼロ戦でしたもん。（中略）戦争が終わってから、20 年もたってない頃ですよ。でも厭戦思想に満ち満ちていたのか、というとそんなことはなくて。少年画報や冒険王は、必ず「大和」かゼロ戦。ちょっと変わったところで、紫電改とかね。だから「大和」、ゼロ戦、隼、なんてのは当時の子供たちは、誰でも知ってましたよ」（別冊宝島 1239『僕たちの好きな戦艦大和』2006 年、宝島社:61）

そしてこの「戦記ものブーム」においても、前章で観察したナショナリズムが作用していた。自らがこのブームに興じた体験を持つ夏目房之介（1950 年生まれ）はこう指摘している。

> 「小学生の頃の私が、戦記マンガをいったいどんなふうに読んでいたかといえば、SF 架空漫画にはない実名性の魅力と、奇妙な敗戦国少年のプライドによってであった。どんなにカッコよく描かれても、日本が負けた事実はかくしようがない。その事実を納得するために、当時私を含む少年たちはかんたんにいえばこう考えたはずだ。零戦を生んだ日本の技術は、当初米国を圧倒するほど優れていたが、資源にとぼしい日本は物量に負けたのだ、と。多分、多くの大人たちが「なんで日本は負けたの？」という子どもの素朴な問いに、そう答えていたのではないかと思う。そこでは「戦争」は正義とか理念の問題ではなく、むしろ技術的な問題だった。敗戦という事実をあえて技術的に考えることで、プライドを保とうとしていたともいえる」（夏目 1997:61、下線引用者）。

また、「戦記ものブーム」と並行して、戦闘機や軍艦の模型づくりがブームとなる。その中心に在ったのもやはり「大和」であったが、ここにも夏目はナショナリズムを指摘する。

> 「子どもたちの想像力の中では、自分の手がなぞる模型の感覚が、マンガの世界のリアリティにつながっていた。模型づくりは子どもの模倣遊びの面白さが基本だが、時代時代に現実にあった技術の反映でもある。（中略）メカに対する子どもの憧れが、実在した戦争メカへの憧れにな

り、敗戦国少年の複雑なプライドを刺激したのである」（夏目 1997:61-62、下線引用者）

事実、当時の週刊誌も、「子供たちは大和や武蔵のプラモデルで、『日本にもこんな軍艦があったんだ』ということを誇りに思っているんです」（『サンデー毎日』1963 年 7 月 28 日号:102）というプラモデル問屋のコメントを紹介している。

このように、「戦記ものブーム」の中においても、戦艦「大和」は敗戦国少年のプライド／アイデンティティを慰撫する文化ナショナリズムの言説として作用していたのである [7)]。

（2）「大和」言説の減少

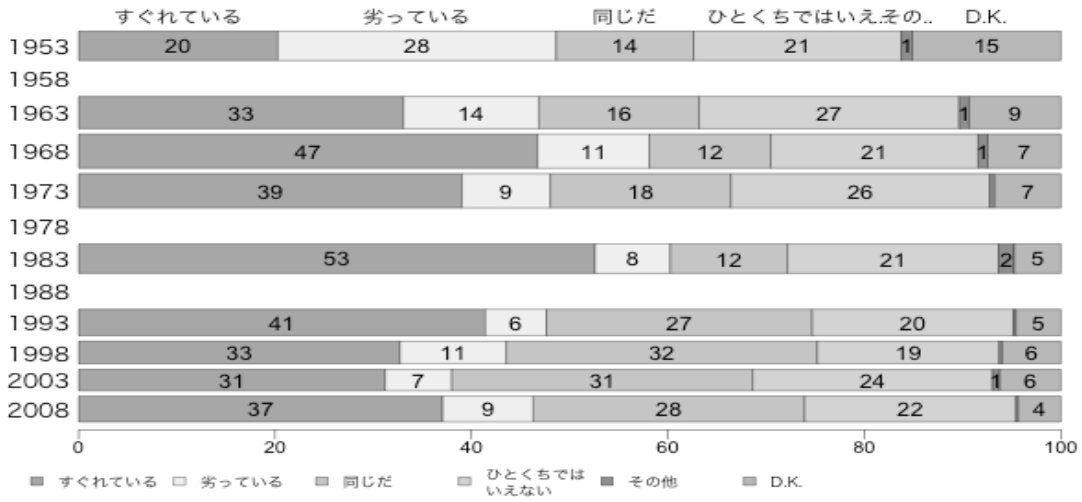
60 年代後半になると、男の子文化における「戦記ものブーム」も去り、同時に一般的にも、「大和」に関する言説や表象が少なくなる [8)]。

その背景には、まず「戦争体験の風化」を指摘することができる。その兆候はこの時期の「戦争の語り」に顕著にあらわれている。成田龍一はこの時期に「戦争の語り」が「体験の時代」から「証言の時代」へと移行したことを論じており（成田 2010）、また高橋三郎は、この時期の戦記ものからは、「凄み」、すなわち「単に戦争とは何かを超えて、人間とは何かを考えさせる」、そして「筆者が個人としてその苛酷な体験を語るなかで読者が感じるもの」（高橋 1988:76）が失われていくことを指摘している。

しかしながら、これまでの考察を踏まえるならば、この「大和」言説 - 表象の減少に対して、文化ナショナリズムとしての「大和」の機能不全、という解釈を与えることも出来るだろう。すなわち、「大和」によってプライドやアイデンティティを回復させる必要が無くなった、ということである。

高度経済成長――1965 年から 70 年までは 11.6 パーセントという伸びを示していた――により、現実に技術大国化・経済大国化する中で、人々は自信を回復する。統計数理研究所が行っている「日本人の国民性調査」によれば、「日本人は西洋人とくらべて、ひとくちでいえばすぐれていると思いますか、それとも劣っていると思いますか？」という質問に対し、「劣っている」の割合が減少し、「すぐれている」という回答の割合が増加するのがこの時期である【図表 1】。

また、1960 年代のベストセラーには、日本の美点を再確認し、日本および日本人を肯定していく内容のものが多くなっていく（辻村 1981:257）。青木保によれば、「肯定的特殊性の認識」によって、経済大国の自己確認の追求が行われるのがこの時期である（青木 1990＝1999）。「大和」を召喚してナショナル・アイデンティティを維持・強化する必要など、もはや無かったのである。



【図表１】統計数理研究所「日本人の国民性調査」

４．70 年代の「ヤマト」

（1）宇宙戦艦ヤマト

さて、戦艦「大和」は、1970 年代に新たな装いで息を吹き返すことになる。アニメ『宇宙戦艦ヤマト』シリーズである [9]。日本のアニメ史およびいわゆる「オタク」カルチャーにおいても重要なこの作品については、周知のように、多くの作品論が存在する。しかしながら本稿では、彼らの主張の詳細に立ち入ることや、その正否を判定することは行わず、また、作品論や内容分析ではなく、『ヤマト』の制作者の意図と、受け手の解釈・消費の様相を観察していく。

このアニメのストーリーを要約しておこう。舞台設定は未来の地球。地球人は異星人からの侵略攻撃にさらされ、日夜落とされる遊星爆弾＝核兵器によって地球全体が放射能で汚染され、地表は死の世界となっていた。生き残った人類は放射能汚染から身を守るため地下に篭るが、滅亡は時間の問題であった。そんな折に、地球を救おうとする別の異星人からのメッセージに従い、地球防衛軍は、第二次世界大戦のとき海中に沈んだ、旧日本海軍の戦艦「大和」を宇宙戦艦「ヤマト」として改造し、放射能で汚染された地球を浄化し復活させるために、宇宙の彼方「イスカンダル」への旅に出る――。

それにしても、60 年代後半にはすでに機能不全を起こしていたはずの戦艦「大和」が、なぜこの 70 年代に「ヤマト」として召喚されねばならなかったのであろうか。その解答は、プロデューサーである西崎義展の企画意図に求めることが出来る。西崎は、高度経済成長ゆえの閉塞感に危機感を表明している。

「生活の行きづまりについて、くどくど説明する必要はあるまい。日本人は驚異の経済成長をなしとげ、物質的には豊かになったが、そこには公害があり、物価高があって、まだまだ幸せとは言えないし、ことに精神面となると、産業社会の歯車となってしまった個人の孤立感を救うすべもない」(『宇宙戦艦ヤマト全記録集』(上) :264)。

そして西崎は、次のような「提言」を行う。

「かつて日本人は、外国の人から、黄色い猿とかジャップとかいわれ、あなどられてきました。しかし今はそんなことはほとんどありません。逆に日本人の勤勉さや、緻密さや、複雑さに、民族としての長所を認め、世界全体がもっと幸せになれるように指導性を発揮してほしいと要望されています。私は、日本人が、このすぐれたところを、もう一度再認識し、それが国際性へつながるように育ってほしい、と心から思います。『宇宙戦艦ヤマト』は、そういう私の強い念願がフィーリングとなって形成された作品だとも言えるのです。」(『ヤマトよ永遠に』パンフレット)

すなわち、佐藤健志が述べるように、西崎は『宇宙戦艦ヤマト』を、「経済大国化ゆえの日本社会の閉塞した状況を、日本人が乗り越える可能性を示す寓話」として構想したのである(佐藤 1992:19)。

(2)「ヤマト」と「大和」

椹木野衣は、この『宇宙戦艦ヤマト』が、「その設定の SF 的想像力にもかかわらず、それはどこかで、見るものに、かつての日米戦争の記憶を呼び覚まさずにはおかない」として、いわば「大和」と「ヤマト」の連続性を指摘している。

「実際、《ヤマト》で劣勢に立たされた人々が地下に都市を作り、かろうじて生き延びようとする様は、防空壕に身を潜めて空爆が終わるのをひたすら待つ、かつての市民の様を思わせる。その頭上で一面の焼け野原となった地表の様子は、アメリカの戦闘爆撃機 B29 によって徹底的に焼き払われた首都＝東京の記憶を喚起するし、次々に投下される未知の放射能兵器によって廃墟となった地球は、ほかでもないヒロシマ・ナガサキを直接、想起させる。また、物語の随所で、絶体絶命の状況に追いやられた人物は、しばしば唐突に自爆攻撃を敢行する。そもそも地球人たちが生存を掛けて銀河へと送り出す宇宙戦艦が、かつて日本海軍の最後の希望と呼ばれた戦艦大和の改造に基づくとなると、事は偶然ではあり得ない。明らかにこの物語は、かつての日米戦争を下敷きにしているのだ。」(椹木 2005:194‐195)

実際、監督・原作を担当した松本零士にとって、この『ヤマト』はやはり戦艦「大和」の復活でなければならなかったのである。それは、松本の「敗戦体験」に由来している。

「（戦後）家族で九州に移ったんですが、それからは敗戦国の暮らしというものが、どんなにみじめなものになるかということを、まざまざと感じることになりました。やはり占領軍にこびる人間とこびない人間の二つに分かれるんですね。私はまだ幼かったですが、こびることはしませんでした。アメリカ兵が投げるキャンディなどは踏み潰して歩いていました。むこうとしてみれば好意からのことで、ひとりひとりのアメリカ人に対してはなんの憎しみもないんですが、全体としてみればむざむざと施しはうけないぞ、という気概がありました。しかし、実際にそういった混迷の時代に身をおいたということは、非常に貴重な体験をできたということで、作品を描くうえで大変役にたっていますね」（別冊歴史読本『呉・江田島歴史読本』:13 - 14）。

また松本は「大和」への思いをこう語っている。「空爆を受けて敗戦を迎え、戦後、進駐軍がやって来た。その大混乱期を生きた、文字通り亡国の民となった日本人ですが、大和のような世界に誇れる科学技術の結晶のような巨大戦艦を造ったという事実が、民族としての自信のようなものとして、日々の拠り所になったのではないでしょうか」（Gakken Mook『戦艦「大和」の真実』:7）

しかしながら、『ヤマト』に「先の戦争の影」を読み込む解釈は、他でもない吉田満によって否定されている。吉田は「『宇宙戦艦ヤマト』を観て、三十三年前の特攻隊を思い出した」との新聞投書を挙げ、それに対し「心配は無用」としてこう論じる。

「ここ（引用者注：『宇宙戦艦ヤマト』）で演じられているのは、いうまでもなく、人間が歴史の中で飽きずにくり返してきた醜悪な凄絶な「戦争」ではなくて、架空の SF 茶番劇に過ぎない。戦うことを強いられた人間の救いようのない苦悶、自己犠牲を覚悟するまでの生々しい憤りは、その片影もない。戦場におもむくものが断念しなければならない愛の深さ、別離の耐え難さは、この映画をしばしばいろどるラブシーンのトーンとは、まるでかけ離れた世界である。幸いにも、この点でこそ、「大和」と「ヤマト」は決定的に異質であり、子供たちの胸に高鳴る鼓動、ほほを伝わる涙は、特攻隊員の空しい死とは何のかかわりもない、無邪気な透明な感傷なのである」（「「宇宙戦艦ヤマト」の世代」『文藝春秋』1978 年 11 月号:218）

実際、『ヤマト』に熱狂したファンたちも「先の戦争」を重ねてはいなかった。『ヤマト』プロデューサーの西崎は、『ヤマト』ファン・クラブのメンバーから作品がヒットした要因を聞き取り、こう述べている。「例えば、「宇宙戦艦ヤマト」のメカニックな部分がいいとか、音楽がいい、ドラマがいい、あるいはアクションがいいと、いろいろおっしゃいますが、ファン・クラブの方々に聞いてみますと、一口では言えない、そういったものすべてが総合されたような一つの匂いというか、フィーリングのようなものの魅力だとおっしゃいますね。」（『キネマ旬報』1977 年 9 月下旬号:132）

また、当時のファン向けの書籍を調査した佐野明子によれば、作品中のさまざまな SF メカやキャラクター設定がおもに紙面を埋めており、ファンタジーではなく現実にあった戦争関連の記事は認められないという（佐野 2009:294）。『ヤマト』ファンたちは、作品の関連情報を収集して楽しむ、

あるいは二次創作を行う、「オタク」的な消費を始めていたのである[10)]。

すなわち、夏目房之介が述べるように、「戦艦大和を改造したカタカナのヤマトは、第二次世界大戦の「戦争体験」を想起させる実名性であるよりも、むしろ遠い歴史の彼方から投影された幻のように、抽象化された「悲劇」の象徴として、若いファンたちに受けとられた」（夏目 1997:111）のである。

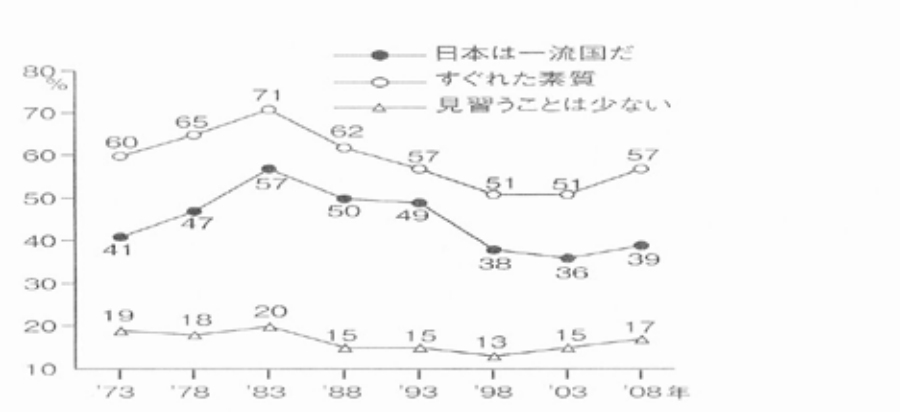
ここでは、『ヤマト』に「敗戦体験」を投影する松本と、ファンたちの受容・消費の間に明らかな齟齬が起こっている。ここに於いて、「戦争体験」や「敗戦」と強く規定し合っていた 60 年代までの「大和」から、「先の戦争」が漂白された「ヤマト」への転回が生じているのである。

この「先の戦争」の漂白という状況は、このアニメに限ったものではない。それは例えば、同じ 70 年代における、『海軍マネジメントの研究』といった大日本帝国海軍の組織や作戦を「組織論」や「経営論」として解釈するビジネス書の出現（吉田 1995＝2005）からも指摘できる。

（3）ナショナル・アイデンティティの安定

では、この「大和」から「ヤマト」への転回を可能たらしめた社会的条件とは何であろうか。本稿では、その解答を前述の「戦争体験の風化」の他に、「ナショナル・アイデンティティの安定」にも見出す。

先にも言及した「日本人の国民性調査」によると、70 年代を通して、「日本人は西洋人とくらべて、ひとくちでいえばすぐれていると思いますか、それとも劣っていると思いますか？」という質問に対し、「すぐれている」という回答の割合は高いまま、「劣っている」の割合は低いまま推移しており、同様に、NHK 放送文化研究所による「日本人の意識調査」においても、「日本は一流国だ」「日本人は、他の国民に比べて、きわめてすぐれた素質をもっている」という項目に対し、「そう思う」と回答する割合は、70 年代から 80 年代半ばにかけて安定して高い割合を示しており、また「今でも日本は外国から見習うべきことが多い」という項目に対し、「そう思う」と回答する割合も、安定して低い割合を示している。【図表 2】



【図表 2】NHK 放送文化研究所『現代日本人の意識構造［第七版］』: 110

このナショナル・アイデンティティの高い安定により、もはや「大和」はナショナル・アイデンティティの拠り所としての機能を完全に失い、「悲劇」の抽象化や、西崎の企画意図とも食い違うかたちでの、無邪気な「ヤマト」の消費が可能になったのである。

５．80 年代以降の「大和／ヤマト／やまと」

（1）戦艦大和の探索

吉田裕は、80 年代に戦争に関する侵略性や加害性に関する認識が増したことなどを挙げ、「ダブル・スタンダードの動揺」を指摘している（吉田 1995＝2005）。さらに、日本人の自信やナショナル・アイデンティティが揺らぎを見せ始めるのもこの時期である【図表１】【図表２】。このような社会状況と、同時期に新たに浮上してくる「海底の戦艦大和の探索」という言説 [11]との、関係の必然性を推察することが出来る。

先に指摘しておいたように、「大和」の物語には自己完結的な性格が纏わりついていたが、この「海底の戦艦大和の探索」という物語は、「敵の顔」は勿論のこと、加害者／被害者責任、あるいは対外関係などは一切介在する余地がない、純粋に自己完結的な物語である。すなわち、「海底の戦艦大和の探索」は自己完結的で内向きの態度のひとつの極点なのである。

こうして、60 年代後半から 70 年代において機能不全を起こしていた文化ナショナリズムとしての「大和」言説は、戦争観やナショナル・アイデンティティが揺らぐ 80 年代において、50 年代から 60 年代とは異なるかたちで――自己完結的な物語として――、再び欲望されるのである。

（2）欲望される「やまと」

続く 80 年代後半から 90 年代にかけての「大和」表象で注目すべきなのは、かわぐちかいじの漫画『沈黙の艦隊』（1988～1996 年『モーニング』連載）である。

ストーリーを要約しておこう。日米共同で極秘に建造された原子力潜水艦「シーバット」の試験航海を行っていた海上自衛隊の海江田四郎二等海佐ら乗組員が、突如艦内で反乱をおこし、以降、海江田を元首とする独立戦闘国家「やまと」を名乗る。危険な核テロリストとして抹殺を図ろうとするアメリカやソ連に、「やまと」は、海江田の天才的な操艦術と、原潜の優れた性能を武器として対抗していく――。

さて、この漫画は、「1989 年のあの時期というのは、世界では冷戦が終結しつつあって、「じゃあ、冷戦が終わったらどうなるの？」「日本はどうするの？」っていう不安感があった。特に日本とアメリカの今後の距離感がよくわからないという感覚があった。で、自分もこの不安感を解消したいなって思いがあって、それで『沈黙の艦隊』を描けば、なんとなく日本と世界、特にアメリカとの距離感が、具体的に自分のなかで組み立てられるだろうと思ったんです」（別冊宝島 1679『僕たちの好きなかわぐちかいじ』:22）とかわぐち自身が述べているように、冷戦体制の崩壊への不安と、ナショナル・アイデンティティの動揺を背景として描かれている。その意味で、かわぐちにとって、

「やまと」は明らかに文化ナショナリズムとしての戦艦「大和」の変奏である。

そしてこの『沈黙の艦隊』は高い人気を博すことになるが、そのポピュラリティの背景を理解するために、現在史のシミュレーション漫画でもあるこのテクストを、同じく 90 年代に数多く書かれ、読まれた歴史シミュレーション小説の文脈に置いてみることにしよう [12)]。それら歴史シミュレーション小説の殆どは、卓越した指導者と超兵器により、架空の第二次世界大戦が日本の勝利に導かれるか、あるいは現実の日本が陥った破滅を回避するという、歴史的事実を反転させた形式を採っているが、そこに山家（2012）は、歴史修正主義的な欲望との随伴を指摘している。そしてそれら歴史シミュレーション小説と自虐史観の修正は共に、「対米従属的な戦後」「アメリカニズムに染め上げられた戦後」である冷戦体制を超克し、90 年代の日本が直面していた国内外の経済的政治的苦境を克服できるように国家再編をおこなおうという企てと結び付いた「記憶政治的」実践であるという（山家 2012:144）。

すなわち、「大和」の変奏としての「やまと」は、こうした冷戦体制の崩壊によるナショナル・アイデンティティの揺らぎゆえに創作され、また 90 年代の社会から欲望され、文化ナショナリズムの言説として作用していくのである。

６．おわりに

本稿では、戦艦「大和」言説 - 表象の受容・消費を歴史的に追尾し、その文化ナショナリズムとしての作用・機能（不全）の様相の変遷を記述してきた。その様相の変遷と強く規定し合ってきたものは、経済変動に伴う国民の「自信」の浮き沈み、及び戦後日本の「戦争観」であった。

吉野（1997）が批判していたように、日本のナショナリズム研究は、ポピュラー文化やサブカルチャーといった、人々の日常意識の水準でのナショナリズムの受容・消費について不十分な分析しかしてこなかったことを鑑みるに、本稿の作業は一定の価値があると言えるだろう。

もちろん残された課題も多い。本稿では、膨大な「大和」言説 - 表象のごく一端を扱ったにすぎず、2000 年代以降の「現在」の分析も行われていない [13)]。また、本稿では「言説」として扱ってきたが、各メディア（文学、映画、アニメ）による差異を検討する、メディア論的な分析も必要であろうし、精緻な受け手分析も必要である [14)]。しかしながら、紙幅は既に尽きた。それらは別稿において考究することにしよう。

【付記】

本稿は、第 82 回日本社会学会大会におけるポスターセッション「「戦艦大和」の表象文化と日本社会」（2009 年 10 月於立教大学）、第 58 回関東社会学会大会における一般報告「「戦艦大和」のイメージ変容と戦後日本の戦争“感”」（2010 年 6 月於中央大学）、およびカルチュラル・タイフーン 2012 におけるパネル報告「戦艦大和ノ表象」（2012 年 7 月於広島女学院大学）に基づくものである。

【注】

1) 「言説の歴史社会学」の実践例としては、赤川（2010）がある。
2) 2000 年以降の現在における戦争観やナショナリズム、および戦艦「大和」に関する言説の有り様―いかなるエピステーメーに浸されていた（る）か―は、いまだ正確に捉えられないからである。
3) 以下、本節の記述は平間編（2003）を参照している。
4) たとえば、江藤淳は「私はこの「大和」の文体に接するたびに、叙述されている事実の悲劇的な性格と同時に、この文体そのものが内包する悲劇性に対して、ちょっと名状しようのない痛切な……哀切というんじゃないんです。痛切な感動を覚えるんです」（吉田・江藤 1975:51）と述べている。
5) なお、福間良明は 2005 年に公開された映画『男たちの大和』について、「敵の顔」の不在を指摘している（福間 2009）。
6) 「戦記ものブーム」の内実を詳細に分析した研究として、伊藤（2004）、高橋（2004）がある。
7) 論者は、このようなポピュラーカルチャーに宿る戦争意識の有り様を、「戦争感」と呼んだことがある（塚田 2012）。
8) 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索の結果、および高橋三郎による「昭和 20～30 年代に発表された「戦記もの」の一覧表」（高橋 1988:186 - 194）に基づく。
9) 1974 年にテレビアニメが放送され、劇場版としては、『宇宙戦艦ヤマト』（1977 年）、『さらば宇宙戦艦ヤマト』（1978 年）、『ヤマトよ永遠に』（1980 年）、『宇宙戦艦ヤマト完結篇』（1983 年）がある。
10) このあたりの状況は、「「宇宙戦艦ヤマト」に泣いた子どもたち」、高山英男「一〇代文化としての〈ヤマト現象〉を探る」（『朝日ジャーナル』1978 年 10 月 27 日号）に詳しい。なお、「おたく」的消費に関しては、大塚（1989）を参照のこと。
11) その代表的なものは、1980 年に行われ、その経過が NHK 特集「戦艦大和探索」として放送された三井（1982）であったり、角川春樹・辺見じゅんによる 1985 年の探索（辺見・原 2004）である。雑誌記事では、例えば、「35 年ぶりに確認。沈没地点は北緯 30 度 41 分、東経 128 度 4 分―2 つに折れ、砂に埋もれた戦艦大和を発見！」『週刊プレイボーイ』1980 年 8 月 31 日号、「鎮魂とロマン　戦艦「大和」探索 100 日のすべて」『週刊読売』1985 年 9 月 8 日号など。
12) なお、かわぐちは後に『ジパング』（2000～2009 年『モーニング』連載）において、アジア・太平洋戦争をシミュレーションしてみせている。
13) 「大和」表象の「現在」を分析したものとして、山里（2011）がある。
14) こうした試みの好例として、福間（2006）がある。

【参考文献】

青木保.1990＝1999.『「日本文化論」の変容』中公文庫.

赤川学.2010.『構築主義を再構築する』勁草書房.

伊藤公雄.2004.「戦後男の子文化のなかの「戦争」」中久郎編『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社:151-179.

NHK 放送文化研究所編.2010.『現代日本人の意識構造［第七版］』NHK 出版.

大塚英志.1989.『物語消費論』新曜社.

小熊英二.2002.『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社.

佐藤健志.1992.『ゴジラとヤマトと民主主義』文藝春秋.

佐野明子.2009.「戦艦大和イメージの転回」奥村賢編『映画と戦争』森話社:279-304.

椹木野衣.2005.「スーパーフラットという戦場で」村上隆編著『リトルボーイ　爆発する日本のサブカルチャー・アート』ジャパン・ソサエティー:187-205.

高橋三郎.1988.『「戦記もの」を読む』アカデミア出版.
高橋由典.2004.「一九六〇年代少年週刊誌における「戦争」」中久郎編『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社:181-212.
竹西寛子.1964.『往還の記』筑摩書房.
塚田修一.2012.「ポップな戦争」野上元・福間良明編著『戦争社会学ブックガイド』創元社:280-282.
辻村明.1981.『戦後日本の大衆心理』東京大学出版会.
永沢道雄.2007＝2012.『戦艦大和と日本人』光人社.
夏目房之介.1997.『マンガと「戦争」』講談社現代新書.
成田龍一.2010.『「戦争体験」の戦後史』岩波書店.
野上元.2006.『「戦争体験」の社会学』弘文堂.
平間洋一編.2003.『戦艦大和』講談社選書メチエ.
福間良明.2006.『反戦のメディア史』世界思想社.
————.2007.『殉国と反逆』青弓社.
————.2009.「『男たちの大和』と「感動」のポリティクス」高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する』世界思想社:244-265.
辺見じゅん・原勝洋編.2004.『戦艦大和発見』ハルキ文庫.
三井俊二.1982.『戦艦大和発見―悲劇の航跡を追って』日本放送出版協会.
山家歩.2012.「偽史への意志」鈴木智之・西田善行編著『失われざる十年の記憶』青弓社:142-164.
山里裕一.2011.「「戦艦大和」と特撮愛」高井昌史編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー』人文書院:227-263.
吉田満・江藤淳.1975.「対談：「大和」以後三十年」『季刊藝術』第 32 号.
吉田裕.1995＝2005.『日本人の戦争観』岩波現代文庫.
吉野耕作.1997.『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.

（つかだ　しゅういち　東京都市大学非常勤講師）